

## 第 26 回 番組審議会議事録概要

---

### 1. 開催日時

令和 6 年 8 月 30 日（金） 午後 1 時 00 分より

### 2. 開催場所

東京都港区台場 2-4-8 フジテレビ本社 会議室

### 3. 出席者

委員長 : 吉岡忍

委員 : 渡邊健一、池田哲雄、宮崎美紀子、砂川浩慶、笹田佳宏、長谷川晶一

株式会社サテライト・サービス

石井浩二、永竹里早、窪田正利、武井俊人

株式会社フジテレビジョン

落合祐輔

JCOM 株式会社

斎藤弘之

ワーナーブラザーズ・ディスカバリー

高山真詩、土谷大輔

### 4. 議題

1) 「密着！FBI 犯罪捜査」 大規模な宝石強盗事件

ディスカバリーチャンネルにて令和 6 年 8 月 21 日放送

2) 「@cx\_motorsports presents 堂本光一のレースのミカタ 2024」

フジテレビ TWO ドラマ・アニメにて令和 6 年 3 月 29 日放送

3) その他 報告事項

審議に先立って石井社長から以下の報告があった。

- ・今年 6 月の株式会社サテライト・サービスの株主総会および代表選任取締役会にて、私、石井浩二が代表取締役社長に、永竹里早が取締役に就任した。

議題番組について各委員から次のような意見が出された。

■ディスカバリーチャンネル 「密着！FBI 犯罪捜査」について

・映画によく出てくるので、FBI や CIA などについては理解しているつもりだったが、FBI と州警察がどのような連携をして、どのように捜査を進めているのかが、とても丁寧に描かれていた。スパイ映画にあるような特別な秘密マシンを使って新たな展開で犯人を追い詰めていくのではなく、一つ一つ防犯カメラを丹念にチェックし、通信の傍受の記録の中で何が一致しているのかを洗い出すといった、地に足のついた捜査で犯人を追い詰めていくドキュメントであるがゆえに、よりカタルシスを得ることができた。

・連続ドラマのようなタイトルなのでスタイリッシュで恰好いい番組かと思ったが、いい意味で期待していたものと違い、映像はほとんど監視カメラで、アクションなど劇的な見せ場もない。知られざる捜査方法というのも、全然派手さとか外連味がない。一枚一枚薄皮を剥いでいくような感じで、FBI とはいえ実際の捜査は地道でオーソドックスなものだったが、派手さはないのにだんだんと引き込まれて最後まで飽きることなく見ることができた。

・ディスカバリーはやはりいいものを放送していると本当に思った。ディスカバリーの番組は展開が早くてカットが短く、視聴する側がついていけないこともあったが、この番組は日本人が見ても、自然に感情移入しながら見られるものになっていると思う。特に見事だなと思ったことは、動く絵としてはほとんどが監視カメラの映像なのに、全然スタティックな印象はなく、ぐいぐい物語が進んでいく感じが本当に素晴らしい。

・登場する捜査官にもそれぞれキャラクターがあり、通信のプロの捜査官も現場の犯人確保のために銃を持ってその現場に行くという驚きやリアリティみたいなことも含め、面白く見ることができた。今回は宝石泥棒という事件だったが、国際テロや、ギャングの抗争、あるいはスポーツ賭博といった、いろいろな犯罪でどのように FBI が絡んでいき、どのような捜査をして犯人を捕まえていくのか、このシリーズの続きが見たくなる。

・日本とアメリカの捜査の違いもこの番組でよくわかった。プロファイリングという手法がアメリカでは 20 世紀の半ばぐらいから確立しているが、犯人はどのような性格で、どのような生活スタイルで、どんな学歴なのか、といったことを犯人の行動様式から探り出していき、そこから容疑者を絞り込んでいくという手法について、番組によってよく理解できた。

・番組の最後に出てくる犯人の飲み友達が「あの女が一番悪だ」とガツンとオチをつけているのが、単にその捜査を追っただけのドキュメントじゃなく、ドラマ的に作っている点が非常に巧みだと思う。あと州の捜査官がネット検索で捜査したことを誇らしく話している場面も、番組としてはユーモラスに描いているように思うが、だからこそこの捜査官はいい性格なのだろうと見る人に感じさせているように思った。人の描き方がうまい番組だと感じた。

・二十代の女性も銃一つ持てば凶悪犯罪をしてしまう、そして逮捕されても司法取引に応じた減刑になることができる、また携帯電話会社への音声記録は日本では裁判所が請求しなければならないがアメリカは警察だけで調べることができる、といったようなアメリカの司法の怖さ、すごさを象徴しているような番組だと感じた。アメリカ国内で制作した番組なので難しいかもしれないが、そういった部分に焦点を当てたメッセージを番組に込めることができれば良かったのではと思う。

・この番組を見て、特に感じたのは日本とアメリカの社会の違いである。現在日本では捜査機関への密着番組が問題になっているが、この番組は事件解決後に番組化されているので、捜査官が画面でべらべらしゃべっているのが日本の警察密着番組と違う点だと思う。日本は「行政としての捜査」を番組にしているような気がするが、アメリカの捜査官は「人が捜査をしている」感じを受ける。警察は行政権力であると同時に、「人」が捜査を行っているのだ、という信頼感みたいなものが社会に根付いているかどうかの違いもあるように思う。

・監視カメラのアップの顔を多用しているが、日本だと裁判が終結してない事件であれば、仮に容疑者であっても本作品のように監視カメラの映像を長時間放送で使うことはできないと思う。アメリカの一般的な常識が日本では異なるケースというのがあり得ると思うが、そういう場合は日本のディスカバリーチャンネルとしてどう判断して放送しているのか？

・犯人の映像を最初に見たときに、捜査官が「この女落ち着いています」とか「今回の強盗が初めてではないと思った」というコメントをしているが、本当にその時に思ったのか？と疑問に感じた。再構成の番組だからこそ、実際に感じたこととは違うコメントもこの作品の中にあるのではないのか？

委員からの意見に対し制作サイドから

(ワーナーブラザーズ・ディスカバリー 高山真詩氏)

・FBIは日本人にとって割と馴染みのある存在ではあるが、実際にどのような捜査をしているのかは実はわかっていないと思う。この番組は具体的な捜査方法が良く描かれており、ドキュメンタリーの専門チャンネルとしては編成する意義があると考えている。

・番組は事件後に再構成しており、当時の実際の捜査を捜査官が後から振り返っていく手法をとっていることで、視聴者的にはわかりやすい内容になっているとともに、再現映像を使って構成している部分はあるが、基本は監視カメラなどの実際の映像を使うことで、番組の展開が早すぎず、日本人が感情移入できるような作りになっていると思う。

・事件の裁判が終結してなかったとしたら、これだけ監視カメラによるアップの映像を放送していいのか、というご意見を頂戴したが、その視点は弊社としては抜け落ちていた。基本的にはアメリカで制作されて、日本ではそのまま編集なしで放送するというルールになっているが、仮に裁判がまだ終結していない事例が番組の中に含まれていた場合は、その都度放送可否の判断をするしかないと思う。

## ■フジテレビ TWO ドラマ・アニメ

「@cx\_motorsports presents 堂本光一のレースのミカタ」について

・「レースのミカタ」というタイトルの通り、F1 を楽しむためのポイントをよく押さえてある番組。堂本さんがひな壇に並んでいるのに、カメラに背を向けてゲストに語りかける場面などは話が盛り上がっていると感じさせて、トークショーとしても面白かった。

・ファンが少なくなってメジャーでなくなっても、F1 をすごく好きな人っていうのは生き残っていて、そういう人たちにとって心置きなく集まることができる場があるっていうことはとても幸せなことだと思う。この番組も堂本さんが「最近なかなか F1 について語る場がない」とか、「地上波だと早送りされる」とかは、この番組に出てる人たちみんなが感じていることでは。この番組は F1 ファンを増やすための番組ではなく、生き残っていた F1 ファンが心置きなく自分たちでしかわからない言葉で語り尽くす番組だと思う。いきなりグリッドロウってなんだよとか、ラップリーダーっていう紹介の仕方ってどうなの？とか、よほどのことでないと字幕を入れないというその姿勢すら潔く感じた。

・この番組を見て F1 が組織で成り立っている点を再認識した。ドライバーがどうしても目立ってしまうが、マシンを作りあげる人々など、ありとあらゆる分野の人たちが世界最高峰の力を使って組み上げていったものが、レースで披露されているということがよく表現できていて、モータースポーツのファンでなくても楽しめる番組構成になっていたと思う。

・(F1 ファンの私は) のめり込んで見た。そういう人たちが多分のめり込んで見る番組が今は地上波ではゼロ。そういう意味で本当にすごいと思った。話の脱線もすべてが愛おしい。時間が足りなすぎる。なんでこんなに短いんだと思った。CS 放送って、そういうところをもっと自由にできるメディアではないかと言いたい。

・私自身は F1 についての関心興味というものはほぼないが、「アメトーク」のように〇〇芸人というくくりで、そのテーマの魅力をとことん語り合うみたいな番組では、自分が興味あるテーマにとことん感情移入できる一方で、自分が全く興味のないテーマを扱っている時でも面白く見ることができる。それは自分が好きなものを情熱持って語る、そういう人を見ているだけでも、実は楽しかったり、幸せな気持ちになれたりするからだと思う。今回の番組を見ていても同じことを感じたが、CS 放送なのだからビギナーを置き去りにしてもいいのではないかと、とにかくマニアを徹底的に満足させる事っていうのを追求すべきじゃないかと思った。堂本光一という人が、普段歌番組で見せる表情や佇まいと明らかに違う、興奮ぶりやマニアックさみたいなものをどんどん追求してくれたら、私はもっと前のめりで見ることができたように思う。

・佐藤琢磨さん、小林可夢偉さんの話は最高だと思った。こういうアスリートの話は聞いたことがない。またエンジニアの方がいろんな細部、つまり真実を語っている点も素晴らしい。

・最初のシーンで堂本さんがタイヤを後ろから覗いて、大きさがどうのという話があって、その後映像が流れてくるのかなと思ったが、全くない。もっと映像を利用できなかったか。

・F1 ドライバーって世界中で 20 人だけという話が出てくるが、じゃあ小林さんがどのように F1 ドライバーになったのかというのはよくわからないままだった。出演者が豪華すぎて、ちょっと話が分散してはいなかったか。

・私はむしろ小林さんとか佐藤さんの話っていうのはもう添物程度か、むしろこの 2 人が聞き役でもいいくらいだと思った。例えば私は宝塚ファンだが、宝塚ファンが集まって語ろうというときに、元ジェンヌ連れて来られちゃったら、その人の話を聞かなきゃいけない場みたいになってしまう。同じように小林、佐藤ってレジェンドたちとファンとの間で上下関係を作らないためにも、お話をお聞きするっていうよりも、一緒に話に加わる方がいい。

・スタジオの並びには再考する余地があるのでは。前にマシンがあって、後ろ二列に出演者が並んでいるが、堂本さんが後ろを向いて一生懸命話の場を作るには限界がある。ある人は誰かの後ろ背中を見ながら喋らなくてはいけなくて、不自然。狭いテーマが議論される時は並びが大事だと思う。セットも真っ白で、マシンと人だけがいるというのはどうか。

・私も実は 1987 年の日本グランプリの取材で鈴鹿サーキットに行ったが、あの音となんとも言えない匂い、独特のものがある。初めてのレースで、一回で取り付かれた感じがあった。今回のこの番組で語られていることは、日本のものづくりそのもの。メーカーとエンジン、タイヤ、ボディ。こういうものを作ることが、日本人は好きだろうと思う。

確かに堂本さんがおっしゃっている通り、F1 は家電製品になってほしくない。とにかく車のエンジンを作り続けてほしいと言っていたが、F1 ファンは本当にそう思っているだろう。非常に興味深い話が多い番組だったが、F1 に詳しい人に向けての番組ということであれば、番組自体がどういう層を狙って、どういうところを見てほしいのかっていうところが、今後問われていくのだろうなと思った。

委員からの意見に対し制作サイドから（株式会社フジテレビジョン 落合祐輔氏）

・フジテレビ地上波で F1 を独占中継していた時代に比べて F1 ファン全体は減少しており、新たなファンを獲得したいという思いで、初回は F1 を取材する側のフォトグラファーの方や、大島さんのような F1 ファンの女性の方々などをゲストに招いてトークを展開した。ただフジテレビの中継を昔からずっと見ていただいているファンの方々も変わらず数多くいらっしゃるので、2 回目に関してはタイヤエンジニア浜島さん、メカニックの白幡さんに加わっていただき、かなりマニアックな内容にしてみた。今日の委員の皆様の話のを伺って、もっとマニアックの方に振ってもいいかと思った。

・時間が足りないというご意見をいただいたが、放送としては 1 時間でも、実はトークが盛り上がっていて 3 時間近く収録している、収録後には堂本さんから、もう少し人数を絞って、例えば居酒屋のようなくだけた場所で、もっとテーマを絞って掘り下げていったらどうかという提案もあった。一つのテーマに絞ったり、もっとライトファンにも見てもらえる内容も盛り込んだりと、いろんなトライをしていきたいと思う。

・セットについては、制作側ともう少し装飾を施してみようかという話もあったが、スタジオの中に 2 台のマシンをあのように並べられるのであれば、マシンをきちんと見せていきたいと考え、周辺をシンプルにした。

・F1 の国際映像は私たちも使いたかったが、様々なルールによって再放送に制限ができてしまうことで、より多くの方に見ていただくチャンスがなくなってしまうのは本意ではないため、この番組では映像は使用しなかった。

■その他、事務局から以下の報告があった。

今年 5 月にフジテレビ ONE スポーツ・バラエティ、フジテレビ TWO ドラマ・アニメ、フジテレビ NEXT ライブ・プレミアム、ディスカバリーチャンネル、アニマルプラネット以上 5 チャンネルにおいて、基幹衛星放送の総務省による業務認定が無事更新された。

今後も放送法を遵守しつつ、今後も基幹放送にふさわしい番組を視聴者の方々にお届けしたい。

次回予定

・次回は令和 6 年 12 月開催を予定。

・議題はフジテレビ ONE スポーツ・バラエティとアニマルプラネットで放送される番組の予定

以上